ドラマ女性学

〈母と私の人生フィナーレは〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

認知症の母と家族の日常を記録した関口祐加監督のドキュメンタリー「毎日がアルツハイマー」三部作の完結編が完成した。留学したまま二九年の海外暮らしから帰国したとき、母は認知症を罹っていた。新しい母娘関係を結び直した関口監督は、そのままカメラを母親と介護者である自分自身に向け、第一部「毎日がアルツハイマー」（二〇一二年）では「認知症」、第二部「毎日がアルツハイマー2 関口監督、イギリスへ行く編」（二〇一四年）では「ケア」をテーマに作品化。わかりやすい題名は、おばあちゃん大好きの一人息子、先人（さきと）君（当時小学生）の命名だ。

完結編「毎日がアルツハイマー ザ・ファイナル」のテーマは、ずばり「死」。「人生の最終章に、認知症の母親にも、介護している自分にも、そして、映画を観ているあなたにも、必ずやってくる最期のとき。私たちは、どのように死んでいきたいのか？」―現在日本の死のあり方からオプション（選択肢）まで、監督は自らの体験を通して問いかける。

母親ひろこさん（八六歳）の自宅介護が五年目を迎えたとき、関口監督は両股関節の痛みが悪化、入院・手術を受けることに。二回の手術、リハビリと自らが「要介護」の身になったとき、介護をされる側もする側も同様に老いてゆき、その線引きは次第にあいまいになってゆくことを実感する。ひろこさんは脳の発作で何度も緊急搬送されるが、「ボケてない」、デイ・サービスに行く日には「私が邪魔なわけ？」と抵抗する。自分は母親をどこまで介護し続けられるのだろうとの不安がよぎる。

二度目の股関節手術で入院した病院で、関口監督は同室の山田トシ子さんと意気投合。〝病棟の母〟と呼ぶほど親しくなるが、彼女はその後緩和ケア病院で息を引き取る。遺族は「眠りながら亡くなった」と。緩和ケアとは何か。死に方にオプション（選択肢）はあるのか。山田さんの死をきっかけに、監督は内外の老いや病、死に深くかかわる人々を訪ねて旅立つ。

イギリスの精神科医ヒューゴ・デ・ヴァール博士は、自身は緩和ケアを望むが、「病状にはこれ以上苦しむことすらできないものもあるので、安楽死という選択肢は、否定しない」という。外国から「自死幇助（ほうじょ）」希望者を受け入れている唯一の国スイスの「自死幇助クリニック」院長で在宅医エリカ・プライチェク博士は、「自分の命に最後まで向き合い、責任をもつ『自死幇助』は新しい死に方の文化です」という。だが、日本ではまだ終末医療についての法整備はできておらず、「自死幇助」や「安楽死」のような死の選択肢をめぐる状況は進んではいない。

関口監督は「介護は永遠には続かない。終わりを見据えて〝本人にとっていい死〟を迎えられるようにすることが、悔いのない介護になるのでは」という。肝心のひろこさんは、「『あらっ、死んでるよ、ばあちゃん』っていうふうに死にたい」とか。それって、圧倒的に多くの人が望む突然死ではないか。実は、筆者自身もそれが望みである。

『毎日がアルツハイマー ザ・ファイナル ～最期に死ぬ時。』

ドキュメンタリー映画（72分）

監督：関口祐加

公開中

© 2018 NY GALS FILMS